

原 著

教員養成における保健の模擬授業の実態と課題の検討 —「他者の実践を対象としたリフレクション」に着目して—

中川麻衣子^{*1} 藤原有子^{*1}

要 約

本研究は、教員養成における保健の「実践的指導力」の育成についての一助を得ることを目的とした。具体的には、中学校・高等学校の「保健科、科目保健」において、様々な題材に触れる模擬授業の実践を通して、「他者の授業実践のリフレクション」に着目し保健の模擬授業の実態と課題を明らかにしようとした。その結果、以下の2点が明らかとなった。(1) 自己の「リフレクション」を深化させる際に、保健の模擬授業における座学形式の学習形態が観察者の学生にとって有効であるという点である。(2) 保健の模擬授業では、「板書」や「説明」に関する記述が多く見られる傾向が示唆された。これは、模擬授業の内容や方法が、「一方的な授業」に終始してしまうことが原因であり、その影響で「授業の雰囲気」をよりよくする改善の記述内容が多くみられた。

1. 研究の背景と問題の所在

ここ数十年、教員の「実践的指導力」の育成を意図した各種答申¹²⁾をよく見聞きする。しかしながら、この「実践的指導力」とは一体どのような資質・能力を指す言葉なのであろうか。

元を辿れば、教育職員養成審議会³⁾の中で、「実践的指導力の基礎」という用語が使用され、「採用当初から教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」と規定されている。また、教職生活全体を通じて育成されるべき「実践的指導力の基礎」を教員養成において身につけさせなければならないことが提言された。一方、秋田⁴⁾と佐久間⁵⁾は、「リフレクション」こそが、教育実践の質を総体的に向上させていく「実践的指導力」の中核であると指摘している。すなわち、「実践的指導力の基礎」は、教科指導力、生徒指導等の職務を遂行し、その実践を振り返る、いわゆる「リフレクション」する力を中核に捉えることが重要である。

ところで、「リフレクション (reflection)」（省察）^{†1)}という概念が、教師教育の中で議論されて久しい。専門職としての教師は「技術的熟達者 (technical expert)」ではなく、「反省的实践家 (reflective

practitioner) であり、「反省的实践家」としての成長が鍵概念となっている⁶⁾。ここでいう「反省的实践家」としての成長は、授業を「リフレクション」すること、そして「リフレクション」そのものを促進していく過程が重要となる⁷⁾。教師は「授業で勝負する」ということがよくいわれる。すなわち、教師の成長において、授業を対象として「リフレクション」していく力そのものが、教員の「実践的指導力」の基盤となると考えられる。これらの指摘を受けて、近年の教員養成では、「リフレクション」に着目した実践を散見することができる⁸⁾。

第1に、保健体育科の教員養成において着目すると、小学校教員養成を対象にした研究において、教育実習前に学校で体育授業を観察する事前指導に加えて、実際に模擬授業を体験することにより学校の児童や生徒の実態を理解する取り組みが求められることを報告している⁹⁾。さらに、中学校の体育教員養成における「実践的指導力」の向上を目指した模擬授業を実施する中で、学生たちの「リフレクション」の変容に着目した実践を報告している^{10,11)}。すなわち、体育科の教員養成において、「リフレクション」の育成を意図した模擬授業の実践が報告されて

^{*1} 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科
(連絡先) 中川麻衣子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-mail : m.nakagawa@mw.kawasaki.m.ac.jp

いる。

とりわけ、体育科の模擬授業における「リフレクション」に関連する先行研究において、藤田¹²⁾は、体育科の模擬授業の実践において、教師役として模擬授業を実施する実践的な経験を境にして、「教材・教具・学習課題」を対象とした「省察」が有意に増加したことを報告している。

第2に、教師教育における「リフレクション」の概念における提言の先行研究に着目する。久保と木原⁸⁾によると、体育科教育に関する「リフレクション」に関する研究を整理しており、「自己の実践を対象としたリフレクション」と「他者の実践を対象としたリフレクション」が混在している研究があることに言及している。また、川口と岩田¹³⁾は、体育科の模擬授業において「他者の実践を対象としたリフレクション」に着目し模擬授業を通して、対象者の「リフレクション」する力の変容に注目している。これは、教員養成における「各教科の指導法」において模擬授業を実施する際に、どうしても授業時間数の制約の中で、教師役と生徒役が分かれ、模擬授業を実践する回数が限定される。すると、教師役になれなかった学生は、結局のところ、「他者の実践を対象としたリフレクション」をよりどころにして、自己の「リフレクション」する力を深めることが肝要となる。

一方、第3に、保健について着目すると、森^{14,15)}は、保健体育科教員の保健授業の質の低さを指摘している。また、山田ら¹⁶⁾は、現職の保健体育科教員に行った保健の授業の実態調査では、保健の授業時間が十分確保されていないこと、保健の授業が体育の授業に振り替えられる、また、保健の授業研究が十分になされていないという実態が報告されてきた。このような現状に対して、近年の教員養成に焦点化した研究には、保健体育科教諭と養護教諭を志望する学生を対象とした「保健の授業に対するイメージ」についての質問紙調査により、保健の授業に対するイメージは両者に差はみられず、いずれも肯定的にとらえていることを報告している¹⁷⁾。さらに、中学校の保健体育科教員の教員養成における模擬授業の実践により、学生たちの「リフレクション」の変容に着目して実践した報告がみられる¹⁸⁾が、体育科の実践と比較するとその報告数は少ない。

他方で、授業形式に着目した時、実技が中心の体育の模擬授業の実践では「教師役」と「生徒役」に分かれ展開されることに対して、教室での講義・演習が中心となる保健では「生徒役」でありながら「観察者」でもあるという点に着目した研究はみられない。

以上の教員養成における「リフレクション」と保健科教育の関係における先行研究を概観すると、他者の授業実践に着目している研究は少ない。しかも、他者の保健の模擬授業の実践を対象としたリフレクションに着目した研究はなく、その成果を検証することは、今後の教員養成カリキュラムにおける質保証の観点からも意義深い。

2. 研究の目的

そこで本研究は、教員養成における保健の「実践的指導力」の育成についての一助を得ることを目的とし、保健の模擬授業の実践方法の検討し、その実態と課題を検証することを目的とする。

具体的には、中学校・高等学校の「保健科、科目保健」における模擬授業の実践を通して、「他者の授業実践のリフレクション」に着目し、保健の模擬授業の実態と課題を明らかにする。

3. 研究方法

3.1 調査対象と調査時期

調査対象は、私立A大学3年次後期開講の「体育指導法D（保健・体育理論）」（2016年9月26日～2017年1月24日）の受講者42名とし、中高の保健体育科の免許状が取得を目指している大学生である。

対象とした授業は、担当教員が2名であり、「各教科の指導法に関する科目」担当の専任教員と学校保健・健康教育学を担当する教員によって協同的に展開した。なお、表1はA大学における「各教科における指導法に関する科目」と教育実習関連科目の概要を示している。

3.2 調査内容および調査方法

3.2.1 A大学における「各教科の指導法に関する科目」のカリキュラムの位置づけ

本研究では、表1の中における「体育指導法D」に限定して研究を行った。次に、表2は、「体育指導法D」（以下、本授業と略記）の授業計画について示している。

本授業は、講義形式と模擬授業形式の授業方法によって構成されている。本授業の特徴としては、講義→模擬授業→講義のサイクルを繰り返し、講義形式の授業で知識の習得につとめ、模擬授業で知識と技能との補完を実施するような授業展開となっている。岩田¹⁹⁾は、体育の教員養成における「指導法に関する科目」を基軸とした「コア・カリキュラム」の提案を行った。その中で教師教育における「リフレクション」する力の重要性から鑑み、「講義型」で最低限の知識を保証し「演習型」によってその知識を技能や態度に結びつける、いわゆる「往還」に

似た機能が重要であると指摘している¹⁹⁾。

その指摘に依拠しながら、本授業においても、模擬授業を6時間実施するようにした。表3は、模擬授業の日程を示している。模擬授業で実践する単位について、4年次の教育実習を見据え、教育実習(中学)グループ、教育実習(高等学校)グループに分かれ、グループで話し合い、希望する単位を設定した。

3.2.2 協議会の進め方

模擬授業後には、必ず協議会の時間を設けることとした。その際、指導教員が協議会を運営した。協議会は、まず、それぞれが5分程度で5～6名程度のグループで意見をまとめ、その後、授業者が反省を述べた後、質疑応答を行った。そして、最後に指導教員が総括の助言をするという流れで協議会を運営した。

さらに模擬授業の教師役は、模擬授業終了後に「リフレクション・シート」を作成し、生徒役(観察者)は、模擬授業開始時に「リフレクション・シート」を配布し、随時記入するように指示をした。

3.2.3 「リフレクション・シート」の概要

本授業の模擬授業後には、学生たちに「リフレクション・シート」(以下、「RS」と略記)を記入させた。

「RS」は、岩田¹⁰⁾や藤田¹¹⁾の先行研究を参考に、学校保健担当の教員と協議して再構築した。

作成した「RS」の項目は、「授業の計画」、「授業の運営」、「教授行為」、「教材・教具」、「その他」の

5つのカテゴリーを設定した。また、各カテゴリーにおいて、「事実」(授業中のどの場面のどの出来事に対してか)、「発展・改善案」(自分ならどうするか、よりよくするためにはどうするか)の2つの段階に分けて記述させた。さらに、それぞれの記述が自己の気づきなのか、他者からの気づきなのかを明確にするために、自分で気づいた点に「◎」、他者に言われて気づいた点には「△」を明記して「リフレクション」を行った。

3.3 分析の手続き

本研究においては、「他者の実践を対象としたリフレクション」について、生徒役の学生が作成した生徒役としての「RS」を分析対象とした。そして、以下の3点の視点に基づき、分析を行った。

なお、他者の実践を対象とした「RS」を対象としたため、授業実践者は記入せず、また、数名の欠席者がいたことから、対象となったシートは、1回目33枚、2日目71枚、3回目59枚、4回目64枚、5回目66枚、6回目64枚であった。

3.3.1 5つのカテゴリー内における記述の割合と1シートあたりの平均記述数

分析対象とした全ての「RS」における各カテゴリー内の記述をカウントし、各回の模擬授業における5つのカテゴリーの記述数の占める割合を求めた。その後、5つのカテゴリーにおける1シートあたりの平均記述数も求めた。

表1 A大学における「各教科における指導法に関する科目」と教育実習関連科目の概要

学年	科目名	主な内容
3年次	保健体育科教育法 A	保健体育科教育概論
	保健体育科教育法 B	教材論・構成論 / 体育科の模擬授業の実践
	教育実習指導論	教育実習にむけて / 模擬授業の実践
	体育指導法 D	保健・体育理論の模擬授業の実践
4年次	体育指導法 E	教育実習を見据えた体育科・保健科の模擬授業の実践
	教育実習(中・高)	3週間の教育実習(母校実習)
	教職実践演習	学習指導案作成、模擬授業、討論、事例研究等

表2 「体育指導法 D」における授業計画

時間	内容	時間	内容
1	●オリエンテーション	9	
2	●学習指導要領における体育理論及び保健科の位置づけ) / 学習指導案の書き方	10	模擬授業
3	●これまでの学びを活かした保健科・体育理論の授業づくりを目指して	11	
4	●保健科の授業の評価と改善①	12	
5		13	●保健の模擬授業を振り返って
6	模擬授業	14	体育理論のプレゼンテーション
7		15	体育理論のプレゼンテーション
8	●保健科の授業の評価と改善②		●保健体育科の授業の評価と改善

※上記の「●」は講義形式の授業を示している。

3.3.2 「自分で気づいた点」と「他者に言われて気づいた点」の比較

本研究で用いた「RS」は、「自分で気づいた点」と「他者に言われて気づいた点」を区別して記述させている。全ての記述をその2点に分類し、その後、各回の模擬授業での1シートあたりの平均記述数を求めた。さらに、各回の模擬授業での5カテゴリでも同様に1シートあたりの平均記述数を求めた。

3.3.3 「リフレクション・シート」の記述内容の分類

「RS」に記述された学生の「リフレクション」の内容を詳細に把握するために、記述内容をKJ法(川喜田, 1967)によって分類してカテゴリを抽出した。分類の際には、内的妥当性を確保するために筆者と学校保健担当の教員と協議を行いながら分類を行った。

4. 結果

4.1 5つのカテゴリの割合とその変容

表4は、5つのカテゴリ(「授業計画」、「授業の運営」、「教授行為」、「教材」、「その他」)の1シートあたりの記述数(平均記述数)を示している。全6回の保健の模擬授業において、「教授行為」に関する記述数の占める割合が高く推移していることが窺える。

また、本結果では、保健の模擬授業を重ねるごとの各カテゴリの記述割合の変容はみられず、同様の傾向がみられた。

4.2 「他者の実践を対象としたリフレクション」

における記述数の総数と「自分で気づいた点」、「他者に言われて気づいた点」の比較

図1は他者の実践を対象としたリフレクションにおける「1シートあたりの記述数の推移」を示して

表3 模擬授業の日程と主な内容

	前半		後半	
	教室 A	教室 B	教室 A	教室 B
10月25日 (1回目)		高等学校① 飲酒と健康		
11月1日 (2回目)	高等学校② B 「性への関心」	中学校② 「環境」	高等学校② 「加齢と健康」	高等学校① 「喫煙と健康」
11月8日 (3回目)	中学校① 「発育発達と生殖」	高等学校① 「水質汚濁」	中学校③ 「水質」	高等学校③ 「働くこと」
11月22日 (4回目)	高等学校② 「妊娠」	中学校② 「衛生」	中学校④ 「飲酒と健康」	中学校③ 「交通安全」
11月29日 (5回目)	高等学校① 「大気汚染」	中学校③ 「交通・傷害防止」	中学校④ 「喫煙と健康」	高等学校① 「運動と健康」
12月6日 (6回目)	中学校③ 「応急手当」	中学校① 「欲求とストレス」	中学校① 「異性の尊重」	中学校④ 「生活習慣病」

表4 1シートあたりの各カテゴリの平均記述数(個)

	授業計画			教師の行動						教材			その他		
				授業の運営			教授行為								
	◎	△	合計	◎	△	合計	◎	△	合計	◎	△	合計	◎	△	合計
1回目	0.85	0.15	1 (22.0%)	0.79	0.24	1.03 (22.7%)	0.45	0.85	1.3 (28.6%)	0.94	0.12	1.06 (23.3%)	0.15	0.00	0.15 (3.3%)
2回目	0.86	0.04	0.9 (18.2%)	0.99	0.21	1.2 (24.2%)	1.34	0.15	1.5 (30.1%)	0.89	0.23	1.12 (22.6%)	0.13	0.11	0.24 (5.0%)
3回目	0.71	0.15	0.86 (15.1%)	1.29	0.19	1.48 (25.9%)	1.66	0.17	1.8 (32.0%)	1.03	0.22	1.25 (28.6%)	0.19	0.10	0.29 (5.0%)
4回目	0.81	0.05	0.86 (14.8%)	1.06	0.34	1.4 (24.1%)	1.28	0.48	1.8 (30.3%)	1.19	0.14	1.33 (21.9%)	0.34	0.12	0.46 (8.0%)
5回目	0.92	0.08	1 (17.1%)	1.09	0.42	1.51 (25.8%)	1.50	0.30	1.8 (30.8%)	1.09	0.14	1.23 (21.0%)	0.24	0.07	0.31 (5.0%)
6回目	1.83	0.22	2.05 (17.4%)	2.06	0.72	2.78 (23.6%)	2.66	0.54	3.2 (27.1%)	1.85	0.57	2.42 (20.5%)	0.98	0.37	1.35 (11.0%)

◎自分で気づいた点, △:他者に言われて気づいた点

いる。この結果より、模擬授業の実施を重ねるごとに記述の量が増加することが明らかとなった。

また、授業におけるRSにおける「自己で気づいた点」と「他者に言われて気づいた点」の割合に着目すると、全体の94.8%が「自己で気づいた点」であり、5.2%が「他者に言われて気づいた点」であった。

4.3 「教師の行動（教授行為）」の内容について

表4から「教授行為」に多くの記述が見られたため、紙面の都合上ここでは「教授行為」における記述内容の分類のみ示すこととする。

表5に「教授行為」の記述内容をKJ法によって分類したものを示した。表5より、1回目および2回目の模擬授業においては、「板書」に関する気づきが最も多い傾向にあった。そして、3回目以降は、「授業の雰囲気」、「説明」に関する気づきに関する記述数が増える傾向にあった。

5. 考察

「実践的指導力の基礎」を教員養成において保障するために、その中核に位置づく学生の「リフレクション」する力を育成する必要がある^{4,5)}。しかしながら、教員養成カリキュラムにおいて限られた授業時数や教育実習の中で、より学生の「リフレクシ

ョン」する力を育成するためには、他者の実践から学ぶ機会をどのように保障していくかが問われる。久保と木原⁸⁾は、「他者の実践を対象としたリフレクション」について、改善案まで考えることで自らの「リフレクション」として機能させることが重要であると指摘している。そこで本章では、模擬授業の「リフレクション」の視点において、他者の実践を対象とした際の自己の「リフレクション」の変容に関する点と保健の模擬授業を実施する意義や課題について、以下の2つの視点で考察を述べていきたい。

第1に、自己の「リフレクション」を深化させる際に、保健の模擬授業における座学形式の学習形態が観察者の学生にとって有効であるという点である。本研究における保健の模擬授業では、生徒役として模擬授業に参加している学生が観察者としての役割を担っていた。さらに、授業開始前に「RS」を配布して模擬授業に参加していたため、授業の中で気づいた瞬間に「RS」に記入することが可能であった。そのため、表4の結果からも分かるように、「RS」における記述の9割以上が「自分で気づいた点」であったことも理解できる。しかしながら、その点に注意すべき事項として大津ら²⁰⁾は、模擬授業中における「RS」の活用においては、「RS」への記入に

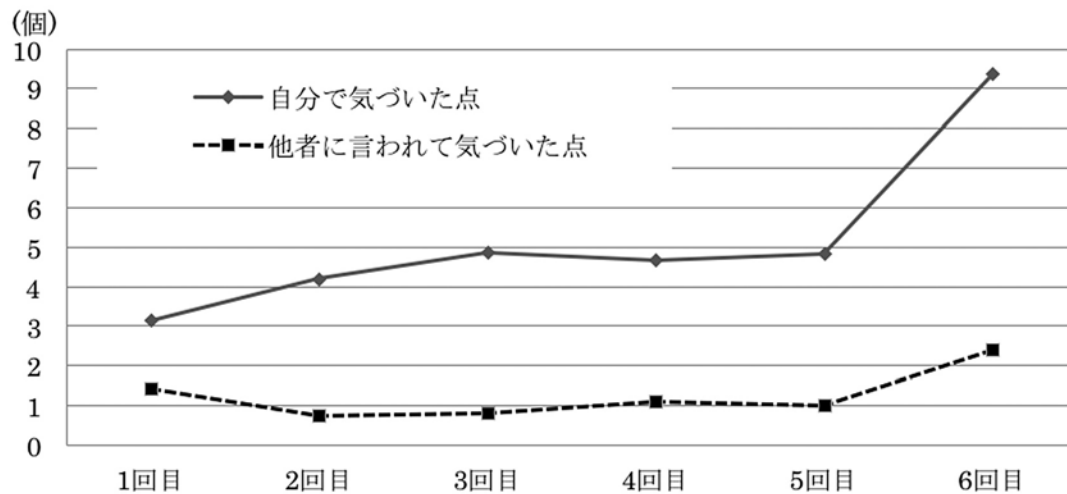


図1 1シートあたりの平均記述数の推移

表5 「教師の行動（教授行為）」記述における記述数の推移（個）

	a (雰囲気づくり)	b (指示)	c (説明)	d (フィードバック)	e (板書)	f (その他)	合計
1回目	4 (9%)	3 (7%)	9 (20%)	0 (0%)	27 (61%)	1 (2%)	44 (100%)
2回目	25 (27%)	3 (3%)	21 (22%)	2 (2%)	40 (43%)	3 (3%)	94 (100%)
3回目	39 (38%)	2 (2%)	27 (26%)	0 (0%)	34 (33%)	2 (2%)	104 (100%)
4回目	31 (28%)	7 (6%)	40 (36%)	0 (0%)	32 (29%)	2 (2%)	112 (100%)
5回目	32 (28%)	0 (0%)	43 (37%)	0 (0%)	32 (28%)	9 (8%)	116 (100%)
6回目	47 (40%)	6 (5%)	31 (26%)	1 (1%)	20 (17%)	13 (11%)	118 (100%)

注視しすぎるために、模擬授業に集中できなくなる可能性を指摘している。

一方、表4から分かるように、「リフレクション」の記述内容は「教授行為」に関する記述数が多数を占める。保健体育科における体育の模擬授業では、グラウンドや体育館などで身体を動かしながら参加するため、「生徒役」が「観察者」として授業を観察する状況となることは困難である。しかしながら、主に教室で行われる保健の授業形態の特質上、模擬授業において生徒役と参加しながらも、観察者としての立場で授業を「リフレクション」することが可能であった。日本の教師文化には授業研究が古くから根付いており、教員として成長していく過程において、校内外の様々な研修において他者の授業実践から学ぶ機会が多くある。そのような観点を鑑みれば、教員養成段階において「他者の授業を観察する力」を身につける必要があり、保健体育科では保健の授業によってその能力を育成していくことが可能となる。体育の模擬授業に関する先行研究を散見すれば、生徒役の学生と観察者役の学生を分けて模擬授業を行っている事例もみられる^{21,22)}。しかしながら、近年の少子化に伴い、今後の教員養成系大学の学生数も激減することが予想される。すると、模擬授業を実施しようにも、受講生が少なく模擬授業の形態をとること自体も困難になってくることもあるであろう。それとは反対に、私立大学の養成校のように多くの学生数を抱える授業科目では、すべての履修者に模擬授業を経験すること自体も困難である場合もある。そこで、保健体育科の教員養成においては、保健や体育理論などの座学形式の模擬授業に特化することで、学生たちの「リフレクション」する力を「他者の授業を観察する力」という側面から保障していくことも検討が必要であろう。

他方、図1からも分かるように模擬授業の回数を重ねるごとに記述数も増加する傾向にある。しかし、6回目に記述数が大きく増加していることから考えると、本研究の対象者は、6回目の模擬授業時以降に観察によって「リフレクション」が深まっている傾向を示している。したがって、数回の模擬授業では、他者の模擬授業を受けて、自己の「リフレクション」を深化させるのは不十分であることが推測される。そのため、他者の模擬授業から「リフレクション」する力を育成しようとするならば、15回の講義の中である程度の模擬授業の回数を確保することも考慮する必要がある。

第2に、保健の授業展開への対応に課題が残るという点である。最も「リフレクション」の視点が集中していた「教授行為」の内容に着目してみると、

表5からもわかるように1回目、そして2回目の模擬授業では「教授行為」の中で特に「板書」に関する記述が多くみられた。他の教科と比べて体育の模擬授業では板書をする機会も少なく、板書に関する知識や技術を持ち合わせていない学生が多くいることが予想される。そのため、保健の模擬授業の中で「板書」が特に課題として挙げられたと考えられる。中川²³⁾は、授業を観察・記録する際、保健体育科の教員を志望する学生は他の教科の学生と比較して、「目に見える教師の行動を軸としてとらえようとする傾向にある」と述べており、本研究も同様の傾向を示している。しかし、この点に着目し、保健の模擬授業によって板書の技術が向上することで、体育の授業においても効果的に板書を活用できるようになり、生徒にとってより理解の深まる授業を展開できるようになることが期待できる。

一方で、3回目以降の模擬授業では「授業の雰囲気」や「説明」に関する記述が多く見られるようになった。これは、2回目までの協議会において「板書」に関する指摘がなされ、教師役の学生が「板書」に関して意識して授業を展開するようになったと推察される。また、藤田¹²⁾は、体育科の模擬授業の実践において、教師役として模擬授業を実施する実践的な経験を境にして、「教材・教具・学習課題」を対象とした「リフレクション」が増加したことを報告している。しかしながら、本研究の結果においては、模擬授業の実践経験が「授業の計画、授業の運営、教授行為、教材・教具、その他」を含む「他者の授業の実践に対するリフレクション」への影響が少ない傾向であることが明らかになった。これは、体育の授業では身体を動かす活動が取り入れやすいのに対して、保健の模擬授業ではいわゆる「教師主導の一方的な授業」となってしまう、「授業の雰囲気」や「説明」に関する指摘が増えたと推察される。つまり、教えた内容を板書するといった一方的な説明に終止してしまい、生徒役の学生の学習意欲が減退するようなマンネリ化した授業内容になっていたため、「授業の雰囲気」を改善していくことが課題として挙げられたと考えられる。そのため、「教師主導の一方的な授業」から脱却するために、授業展開における工夫が必要であり、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開の必要性が求められるだろう²⁴⁾。ただし、その際には、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業をただの方法論としてのみ捉えるだけでなく、授業の目標と方法がどのように学習効果につながっているのかという視点で学生に「リフレクション」をさせることが重要となるであろう。その結果、自己の模擬授業の実践や他者の模擬授業

の観察から保健体育科教師としての教授技術の多様性を学ぶことができ、幅の広い指導を行うことができる教師へと成長する礎を築くことが期待できよう。

6. 摘要と今後の課題

本稿は、保健体育科の教員養成における保健の「実践的指導力」の育成についての一助を得ることを目的とした。具体的には、中学校・高等学校の「保健科、科目保健」における模擬授業の実践を通して、「他者の授業実践のリフレクション」に着目し、保健の模擬授業の実態と課題を明らかにしようとした。

その結果、以下の2点が明らかとなった。(1) 自己の「リフレクション」を深化させる際に、保健の模擬授業における座学形式の学習形態が観察者の学生にとって有効である、(2) 保健の模擬授業では、「板書」や「説明」に関する記述が多く見られる傾向が示唆された。これは、模擬授業の内容や方法が、「一方的な授業」に終始してしまうことが原因であり、その影響で「授業の雰囲気」をよりよくする改善の記述内容が多くみられた。

今後の課題としては、保健の模擬授業を実施する際に、本実践のようにいろいろな題材に触れさせながら実施していくことも重要であるが、一方で小単

元のようなひとまとまりの内容を意識化させるような意図した模擬授業の実施を考慮することも肝要であろう。あるいは、模擬授業で触れる題材を限定する中で、同じ内容の模擬授業を複数回繰り返す中で「リフレクション」の深化を目指す手立ても重要である。以上のような実践方法の工夫により、対象となる学生の実態に応じた模擬授業の実践が可能となる。

学校現場や教員養成系大学では、保健体育科における保健の授業を軽視する風潮があることがよく指摘される（例えば、森²⁵⁾）。そのような風潮を脱却させていくためにも、教員養成を担う大学で従事する保健科教師教育者の力量も鍵概念となってくるであろう。

謝 辞

本研究は、科学研究費助成事業（若手研究 B）課題番号15K17414の支援を受けて行った研究成果の一部である。

†1) 本研究では、「reflection」をカタカナ表記の「リフレクション」と記載することとした。

文 献

- 1) 文部科学省中央教育審議会：教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm, 2012. (2017.4.1確認)
- 2) 文部科学省中央教育審議会：これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について 一学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて―（答申）。http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf, 2015. (2017.4.1確認)
- 3) 文部科学省教育審議会：新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第1次答申）。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315369.htm, 1997. (2017.4.1確認)
- 4) 秋田喜代美, 佐藤学, 岩川直樹：教師の授業に関する実践的知識の成長―熟練教師と初任教師の比較検討―。発達心理学研究, 2(2), 88-98, 1991.
- 5) 佐久間亜紀：教師の学びとその支援。油布佐和子編, 転換期の教師, 日本放出版協会, 東京, 207-223, 2007.
- 6) 佐藤学：教師の省察と見識―教職専門性の基礎―。日本教師教育学会編, 日本教師教育学会年報2号教師としての成長, 日本教育新聞社, 東京, 20-35, 1993.
- 7) 久保研二, 木原成一郎, 大後戸一樹：小学校体育科授業における「省察」の変容について―考察。体育学研究, 53, 159-171, 2008.
- 8) 久保研二, 木原成一郎：教師教育におけるリフレクション概念の検討―体育科教育の研究を中心に―。広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域, (62), 89-98, 2013.
- 9) 梅野圭史, 海野勇三, 木原成一郎, 日野克博, 米村耕平：教師として育つ―体育授業の実践的指導力を育むには―。明和出版, 東京, 2010.
- 10) 岩田昌太郎, 久保研二, 嘉数健悟, 竹内俊介, 二宮亜紀子：教員養成における体育科目の模擬授業の方法論に関する検討―「リフレクション」を促すためのシートの開発―。広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域, (59), 329-336, 2010.
- 11) 藤田育郎：よい体育授業に対する認識の育成を目指した模擬授業の成果―授業映像視聴による省察―。信州大学教育学部研究論集, 6, 143-152, 2013.
- 12) 藤田育郎, 岡出美則, 長谷川悦示, 三木ひろみ：教員養成課程の体育科模擬授業における教師役の経験の意義につ

- いての検討—授業の「省察」に着目して—, 体育科教育学研究, 27(1), 19-30, 2011.
- 13) 川口諒, 岩田昌太郎: 教員養成課程の模擬授業における学生の「他者の実践を対象としたリフレクション」の育成に関する事例研究. 日本体育学会大会予稿集, (66), 382, 2015.
 - 14) 森昭三: 保健担教師養成と保健科教育. 学校保健研究, 17, 386-390, 1975.
 - 15) 森昭三: 21世紀の学校健康教育再考—批判に答えて—, 学校保健研究, 39, 293-298, 1997.
 - 16) 山田七重, 植屋清見, 森昭三, 中村和彦: 中学校・高等学校における「保健の授業」の実態と保健体育教諭の意義. 日本体育学会大会号, 43, 560, 1996.
 - 17) 山田浩平, 藤原朋香, 山崎里紗: 養護教諭志望者と保健体育科教諭志望者の保健学習に対する意識の比較. 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 5, 69-76, 2015.
 - 18) 長田光司: 保健学習の指導力向上のための模擬授業の効果と課題—省察の変容に着目して—, 学校保健研究, 58(1), 33-38, 2016.
 - 19) 岩田昌太郎: 体育教員養成カリキュラムの改善に関する基礎的研究—「指導法に関する科目」を基軸とした「コア・カリキュラム」の提案—, 広島大学大学院教育学研究科博士論文, 2007.
 - 20) 大津一義, 桃崎一政, 加藤種一, 千葉裕典: 保健体育科教員の養成に関する調査研究 その3 保健体育科実習を効果的に進める上での模擬授業の検討. 順天堂大学保健体育紀要, 24, 57-72, 1981.
 - 21) 木原成一郎, 村井潤, 坂田行平, 松田 泰定: 教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域, (56), 85-91, 2007.
 - 22) 日野克博, 谷本雄一: 大学の模擬授業並びに教育実習における省察の構造. 愛媛大学教育学部保健体育紀要, 6, 41-47, 2009.
 - 23) 中川明: 保健体育の教師はなぜ保健の授業が苦手なのか?. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 35, 63-73, 2010.
 - 24) 溝上慎一: アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂, 東京, 2014.
 - 25) 森昭三: 新しい保健の学習指導要領に思う. 体育科教育, 56, 50-53, 2008.

(平成29年5月8日受理)

A Study of Current Status and Issues on Micro-teaching of Health Education in Pre-serviced Education: Focusing on ‘the Reflection of Others Practice’

Maiko NAKAGAWA and Yuko FUJIWARA

(Accepted May 8, 2017)

Key words : teacher education, health education, micro-teaching, reflection

Abstract

This research is aimed at contributing to the development of practical teaching skills for teachers-in-training in health education. Specifically, we conducted mock classes on various topics covered in health education in middle schools and high schools, focusing on students observing and reflecting on the performance of their colleagues, in order to identify teaching practices and issues. The research resulted in the following two findings. (1) The classroom lecture format of the mock health classes was beneficial for students observing the performance of their colleagues because it allowed them to reflect more deeply on their own performance. (2) Many students wrote comments referring to the use of the blackboard and explanation techniques. This is because the content and method of these simulated classes only involved one-way teaching, so many students wrote about improving the atmosphere of the classes.

Correspondence to : Maiko NAKAGAWA

Department of Health and Sports Science

Faculty of Health Science and Technology

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : m.nakagawa@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.1, 2017 105 – 113)

